

られたものが、晝夜駕籠を飛ばして来るものをいうた。江戸より金澤へ四日半、京都より金澤へ二日餘を要した。

ハヤカハセンリユウ 早川泉流 諱は信之。佐々木泉玄門の孫人で、泥繪も扱いた。

ハヤシ 林 江沼郡能美郷に屬する部落。寛永三年の檢地畧書には能美郡に列してある。又江沼志稿に、この村に堡蹟があり、土居壘形を存し、大馬出などの地名もあると記する。

ハヤシイチロエモン 林市郎右衛門 御馬廻に屬し、祿二百石、出銀奉行を勤めてゐたが、暨銀の罪露見し、貞享四年九月廿七日伴八矢長資に御預となり、十二月十日刃首の刑に處せられた。子吉三郎九歳、乙之助三歳も亦同座して、林十左衛門の家に殺害せられた。

ハヤシウチ 林氏 尊卑分脈大系圖に藤原利仁六代の孫宗助の子従五位下豊前守林貞宗、その子加賀介貞光林介と號した。貞光の嫡子従五位下林大夫光家、二男加賀介成家は林新介と號した。光家の子林六郎光明。光明の嫡子林太郎光平越前の合戦に討たれ、二男林次郎光茂。光平の嫡子林次郎家繼、二男林三郎光時は後に出家した。光茂の子林小二郎家綱。家綱の嫡子林六郎則光、二男林繼二郎家朝、とある。この林氏は富樫氏と同族で、石川郡林郷を所領としたから、林氏を稱したのであらう。

ハヤシカゲタフ 林景任 ↓カメダシヨウサイ 龜田商齋。

ハヤシカツヤス 林克安 通稱淺右衛門。享保十年御歩となり、後御鷹方御用を勤め、

寶曆六年小頭並として新知六十石を受け、明和二年三十人頭に轉じて二十石を増し、六年組外に班し、八年正月十六日六十六歳を以て歿。子孫藩に世襲する。

ハヤシカツヤス 林克毅 通稱儀三郎・彌四郎。天明五年十二月養父左平太安千の遺知三百石を襲ぎ、加州御郡奉行・改作奉行・御勝手方御用兼定檢地方に厯任し、享和三年九月俸五十石を増し、次いで物頭並・御先手頭となつて、文化十一年歿した。

ハヤシガマ 林鑑 江沼郡林に於いて焼かれたといふ陶器。秘要雜集に、『延寶三年二月御郡林村にて、皿鉢類の焼物を、金澤町人藤屋吉兵衛・小松町人安吉喜兵衛杯いふ者焼初めし由。』と見える。

ハヤシゲンイク 林玄育 御醫師で元祿三年江戸に於いて召出され、六百俵を受け、正徳五年歿。子伯立の時加賀に移り、その養子玄潤を經、玄悦安通は三百石を襲いたが、暨業未熟なるを以て、天明五年五十石を減じて組外に班せしめられ、名を玄左衛門と改めた。後子孫藩に相繼ぐ。

ハヤシゴウ 拜師郷 石川郡の古郷名。和名抄に『拜師、波也之』とあり、後には林郷と書いた。蓋し元來林とあつたのを二字に改め、更に林に還元したものであらう。林郷となつてからは、また上林・中林・下林の三郷に分ち、元龜・天正の交一揆の魁善四郎が之を領して、三林善四郎と呼ばれたこともある。

ハヤシゴウ 林郷 石川郡に在つて、藩政時代に太平寺・位川・上林・中林・下林・三納・藤平田・藤平田新・部入道・柴木・熱野・道法寺・荒屋・井・口・知氣寺・日・御子・小柳・月橋・明島の

十九、村を含んでゐた。

ハヤシゴウハチマンシヤ 林郷八幡社 石川郡上林に鎮座する。その境内にある老椎樹は胸高周圍一〇米八、高さ三六米を測る。蓋し我が國の椎樹中地上一米五に於いて周圍九米を超えるものは僅かに八株に過ぎぬ。高知縣高岡郡別府村不入の椎を以て最大とするが、この林郷のものは愛知縣幡豆郡三和村の椎、及び東京府三宅島伊豆村堂上の椎と共に第二位の地位を争ふものである。

ハヤシジユウザエモン 林十左衛門 父淺井準人は織田信長に仕へたが、後浪人となつて慶長四年に歿。十左衛門は初め織田河内守長次に仕へ、次いで氏を林と改め、前田利常に臣事して二百五十石を受けた。利常の小松に隠栖した時之に従ひ、正保元年歿。子孫藩に世襲する。

ハヤシジンスケ 林甚助 父は茂右衛門。基助初め織田河内守長次に仕へたが、主の死後寛永十年前田利常に臣事し、祿三百石を受けた。子孫藩に世襲する。

ハヤシスケダユウ 林助太夫 初めて前田利常に仕へて千石を受けた。子孫世々藩に仕へる。

ハヤシハチベエ 林八兵衛 能美郡若杉の十村であつた。八兵衛は瓦窯を有つてゐたから試みに製陶を工夫してゐたが、文化八年もと春日山窯に従事してゐた本多貞吉が寄食したので、之をして陶窯を開かした。若杉窯といふものは是である。歿年等は詳かでない。世に入兵衛は若杉窯を築いて勸農の功多かつたが、誤つて公金の出納その當を失し、金澤の獄に下つたと傳へるものがあるが、これは明

和元年に歿したといふから、製陶の八兵衛の先代かと見られる。

ハヤシヒロミチ 林弘道 字は玉汝、一字成夫。青丘又は龍野と號した。通稱孫太郎。人と爲り魁奇豪邁、六經を誦するに従頭直下桑門の佛典に於けるが如く、且つ徧く古今の事歴に通じて該博遺す所がなかつたが、不幸未だ壯ならずして歿した。或は二十五歳ともいふ。享保・元文の頃の人。

ハヤシマタクロウ 林又六郎 初め午之助。文政十年七月父の遺知五百石を受け、十一年大小將となつたが、天保十一年不届の廉を以て人持に御預となり、同年七月知行を召放された。

ハヤシミツアキラ 林光明 通稱六郎。林大夫光家の子で、壽永二年木曾義仲に屬し平軍と戦つたことは源平盛衰記・平家物語に見える。越前誌に、林六郎大夫光明は吉田郡藤島地の頭職であつたとある。然れば光明は越前にも所領があつたのであらう。今白山比咩神社藏に林光明の寄進と傳へる國寶黒漆螺鈿の鞍がある。

ハヤシミツヒラ 林光平 ↓イマキデラミツヒラ 今城寺光平。

ハヤシヤスユキ 林保之 通稱千之助・織人平次郎・十左衛門。安永六年養父津右衛門政守の遺知二百五十石を受け、大小將組に班し、天明二年表小將となり、寛政二年五十石を加へ、七年表小將横目から漸く上つて定番頭に至り、文政十一年歿した。

ハヤシヤセキソウ 林屋石齋 金澤の俳人。眉山の門から出た。通稱權兵衛。

ハヤシヤマゲンユウ 林山玄猷 鹿島郡鹿